

猿声はなぜ悲しいのか

池 田 昌 広

目 次

はじめに

1 詩語「猿声」の成立

2 嘯と悲哀の表現

3 猿声と嘯

おわりに

キーワード：猿声，テナガザル，嘯，『詩経』鄭箋，「洞簫賦」

はじめに

中国の古典詩において、猿の鳴き声は頻出のモチーフとあってよい。「旅人を望郷の念にさそう悲しい声」といったあたりが典型的な用法で、要するに悲哀の詩情を写す道具だてのひとつである。実際の作例では種々の表現があるけれど、いまかりに「猿声」の用字をもって代表させよう。

詩語としての猿声については、松浦友久による詳細な専論「「猿声」考」（『詩語の諸相——唐詩ノート』増訂版，研文出版，1995年。初出1977年。以下，松浦論文）がある。わたしも多くを教えられた¹⁾。松浦論文によれば、猿声は『楚辞』系の詩語として始まり、六朝時代に詩材とすることが一般化したらしい。くだんの一般化の過程で、猿声は悲哀の語感をまとうようになるらしいのだが、わたしの関心は猿声がなにゆえ悲哀の義に解されるようになったのか、というところにある。

松浦論文もむろんこの問題に紙幅をさいている。つまるところ、猿の鳴き声の聴覚的特色が悲哀の感情をさそうにふさわしいと詩人たちに受けとめられたからと結論する。しかし松浦のいう聴覚的特色とはなにかと問えば、「かん高く鋭い声」というほどのことしか解説はない。そのような音声がなぜ悲声と認識されたのかという肝腎の点について、松浦論文を読むかぎり、じつはよく分からないのだ。したがって、なぜ猿声が悲哀の詩語になるのかもよく分からないということになる。

小論は、松浦論文とはちがう視点から猿声がなにゆえ悲哀のイメージをもつようになったのか、そのわけを詮索しようとする、ひとつの試論である。やや先走ったことをいえば、くだんの理由は聴覚ではなく視覚、より具体的には猿の発声時の両唇の姿態にこそとめられると考える。まずは、章をあらため、おもに松浦論文をたよりに猿声の歴史を概観しておこう。

1 詩語「猿声」の成立

詩語としての猿声の用例はいつまで遡及できるか。

現存文献では『詩経』に用例はなく、『楚辞』が最早のようである²⁾。『楚辞』はしばしば猿(猿・猿³⁾)を詠んでおり、そのうちつぎの2例で猿声を詠う。ひとつは九歌の山鬼に見える「猿啾啾兮又(一作「狢’)夜鳴」, もうひとつは招隠士の「猿狢群嘯兮虎豹嘯」の例である。猿声は『楚辞』系の詩語としてはじまったと思しい。ただ注意すべきは、『楚辞』の例にはなお悲哀の語感が確認できないことである。

松浦論文によれば、猿声が悲哀の情緒をまとうようになるのは三国時代以降という。その最早の例のひとつとして、こんにち「毛詩草木鳥獸虫魚疏」(以下、陸疏)と呼ばれる『詩経』の注釈を、松浦はあげる。陸疏の撰者は孫呉の陸璣とされる⁴⁾。

陸疏は『詩経』小雅の角弓の「母教猱升木」に注して、かくいう。

猱，獼猴也，楚人謂之沐猴。老者為猱，長臂者為猿，猿之白腰者為獬胡。獬胡猿，駿捷于獼猴。其鳴嗷嗷而悲。(陸疏，卷下)

傍点を附した「其の鳴くや嗷嗷として悲し」の文に注目されたい。「獬胡猿」のみにかかるのか、「猱」全体の解説か明瞭ではないが、該文は猿の鳴き声に悲哀の調べをみとめている。『詩経』の正文は単に木登りの巧みさをいうに過ぎないのに、陸疏の時期には鳴き声そのものへの注視があって、かつこれが悲哀の情緒をおびているのだ。

松浦論文が陸疏とともに注目するのが「漁者歌」と呼ばれる民歌である。たとえば、北魏の酈道元『水経注』巻34「江水」に下記のごとくある。

自三峡七百里中，兩岸連山，略無闕処，重巖疊嶂，隱天蔽日，自非停午夜分，不見曦月。至于夏水襄陵，沿泝阻絕，或王命急宣，有時朝發白帝，暮到江陵，其間千二百里，雖乘奔御風，不以疾也……每至晴初霜旦，林寒澗肅，常有高猿長嘯，屬引淒異，空谷伝響，哀轉久絕。故漁者歌曰，巴東三峡巫峽長，猿鳴三声淚霑裳。

くだんの「漁者歌」の成立はさらにさかのぼるようで、『藝文類聚』巻95，猿に引かれた『宜都山川記』佚文にかくいう⁵⁾。

宜都山川記曰，峽中猿鳴至清，諸山谷伝其響，泠泠不絕，行者歌之曰，巴東三峡猿鳴悲，猿鳴三声淚霑衣。

また『太平御覧』巻53, 峽に引かれた『荊州記』佚文にかくいう⁶⁾。

盛弘之荊州記曰……常有高猿長嘯，属引凄異，空岫伝響，哀転久絶。故漁者歌曰，巴東三峽巫峽長，猿鳴三声涙霑裳。

両記に見える「漁者歌」には小異があるけれど、まずは同一の民歌を記録したものと考えて差しつかえなからう。『宜都山川記』は東晋の袁山松（または崧）の、『荊州記』は劉宋の盛弘之の、それぞれ撰とされる。そうであれば、「漁者歌」はおそくとも六朝時代前半には成立していたと推される。

「巴東」とは巴郡（四川東部）の東部をいうらしい⁷⁾。そのあたり三峽の舟旅の険しさと悲哀を帯びた猿の鳴き声との結びつきの妙は、詩人たちに大いに受けたようである。梁の簡文帝「折楊柳」や陳の蕭詮「賦得夜猿啼」に類似の表現が見える。こののち六朝時代後期には、「漁者歌」のイメージを軸にして、猿声は悲哀を意味する詩語として定着する。猿声を素材とする詩賦が六朝時代にはいって急増し、それまでは存外少ないのはそのためと考えられる。唐詩における用例にいたっては、たとえば李白「早発白帝城」⁸⁾、杜甫「登高」の有名作をはじめ枚挙にいとまがない。

以上、おもに松浦論文によりつつ、猿声の初出からこれが悲哀の詩語となるまでを概観した。「猿声＝悲哀」の等式がほぼ完成するのが六朝後期という松浦の見通しは、まずは首肯できよう。ただ、これだけでは猿声がなにゆえ悲哀の語調を帯びるようになったか明白でない。猿声の歴史がおおむね諒解されたところで、小論の主題であるこの課題に筆をすすめよう。

そのまえに一言しておきたい。これまでなにもことわらず「猿」と表記してきたが、これには注記が要る。日本語ではサルといえばおしなべて「猿」の字を書くが、漢語ではおなじサルでも、テナガザル (gibbon) を「猿」、オナガザル (monkey) を「猴」と呼び区別する⁹⁾。しかもくだんの区別は用字の相違にとどまらない。高級な猿と低級な猴という隔絶した序列があった。猴が最もありふれたサルにして狡猾で粗野なイメージであるのにたいし、猿は深山幽谷にのみ産した珍奇なそして超俗的なサルとされ人間のごとくあるいはそれ以上の高等生物として神聖視された¹⁰⁾。知識人にとって両者がおなじサルとはいえ、いかに対照的な存在であったか、唐の柳宗元「憎王孫文」について見るのが分かりやすい。「憎王孫文」によれば、猿(猴)は仁・讓・孝・慈の美德をそなえ秩序をまもり草木を大切にす。ひるがえって王孫すなわち猴はその正反対、さわがしく、秩序をみだし、弱者を犠牲にし、草木をふみつける。猿は君子をたとえ、王孫(猴)は小人をたどっているのだ(南宋の黄唐の言)¹¹⁾。中国文化史においてテナガザルが特別な地位にあることは諸書に見える。たとえば、『太平御覧』巻910, 獸部, 猿に「又(抱朴子)曰, 周穆王南征, 一軍尽化, 君子為猿為鵠, 小人於千仞為沙為泥」とある¹²⁾。君子が変化したのがまず猿だったことはテナガザルの地位をものごとがたっている。このあ

たりの消息は、文献や絵画資料を博搜したロベルト・ハンス・ファン・フーリクの専著『中国のテナガザル』（中野美代子・高橋宣勝訳、博品社、1992年。原著1967年刊）が委細をつくしている¹³⁾。

猿と猴とにこのような区別があった事実から、中国の詩文にいう「猿声」とはテナガザルの鳴き声を指すだろうという判断がまずみちびける。ただ猿声を詠んだ詩人たちが実作にあたり猿と猴とをつねに厳密に区別していたかという点、かならずしもそうではないらしい。松浦論文によれば、両者が混用されることはしばしばあったし、また語彙史的に猿が文言的、猴が白話的であったため、古典詩には猿が頻用されるという側面もあった。これらを受け松浦は、猿声の解釈から猿と猴との動物学的区別を斥ける。つまり猿声の主体は実際にはテナガザルに限定されないというのである。なるほど、そういうことはあったかもしれない。

しかし、わたしは猴ではなく猿の鳴き声こそが悲しいという認識は、そのような理解が成立した時点ではやはり意味があると考え。猿と猴とが混用される事態は、両者の区別が不要なほどに「猿声＝悲哀」の等式が一般化したということをしめすにすぎないであろう。一般化のちであれば猿と猴との区別に拘泥する必要はない。猿声ではなく猿声であったのは、テナガザルが神聖視された動物であったからこそ、それが鳴き声を発する行為にある意味づけがなされたということなのだが、詳細は後段で述べるはずである。

2 嘯と悲哀の表現

猿声がなぜ悲哀を表現するのか。

清の沈徳潜『古詩源』は「漁者歌」を「女兒子」の題で収載し、それに「猿鳴至清，行者聞之，莫不懷土，説猿声之悲始此」と注する（巻9）。沈は猿声が清らかゆえに悲哀のひびきを帯びると解するようである。つまり聴覚的特色に悲声の所以をもとめる。松浦論文も同趣向である。その27頁にかくいう。

「猿鳴三声」が涙の種になるのは、何より巫峽の舟行の険しさや遙けさによってであるが、同時にそれが、そうした感情をさそうにふさわしい聴覚的特色をもつものであることも留意されてよい。

そして、もっぱらサルの声の鋭さやかん高さが、中国の詩人には悲哀の情緒的表現によって受けとめられたと論ずる（36～37頁）。上述のように、松浦のいうサル声はテナガザルに限定されないから、オナガザルもふくめサル一般の鳴き声にそのような特徴があるということになる。沈や松浦のような理解への反論を、わたしは寡聞にして聞かぬところがない。猿声が悲哀の詩語となった理由を聴覚的特色にもとめる説明はまずは通説といってよいであろう。

テナガザルの鳴き声は独特だ。かれらはなわぼり意識が非常につよく、これを宣言し侵入者を追いはらうために鳴く。有名なグレート・コール (great call) である。単一の発声を系列的に組合せた複雑な「歌」と呼ばれる音声を、数十分にわたり毎日ほぼ決まった時間帯に大音量でくりかえす¹⁴⁾。いまテナガザルの鳴き声はネット上で公開され容易に聴くことができる¹⁵⁾。

複数のバリエーションをもつその鳴き声の特異性をみとめるにやぶさかではないが、なぜこの音が詩人たちを悲しみの感情にさそうのか、通説によるかぎりなんの説得的な情報も得られない。その音に悲哀を誘発する音声の特徴があるといったところで、猿声が悲声たるわけを説明したことにはならないのではないか。そもそも鳴き声じたいに悲哀を感じさせるひびきがあるというのは、じつは反証不能なものいである。音声をどう感じるかは主観に左右される部分がおおきい。その音声が悲哀をさそう性質のものか否かの論拠を音声じたいにもとめることに、どれほど客観性があるのか、疑問なしとしない。通説が、猿声が悲哀の詩語であるのだからその音声には悲哀をさそう音調があるはずだ、と立論しているとすれば、それは循環論法である。小論を公表する所以である。

猿声が悲哀のひびきをもったのはなぜか。わたしは通説とはちがう視点から、これに合理的説明をあたえたいと思う。

まず、猿声が悲哀のしらべをおびた最早の例を確認しておこう。くだんの例として松浦論文は陸疏をあげたが、わたしの調査ではさらにさかのぼり、前漢の王褒「洞簫賦」(李善注『文選』巻17)が最早の例と思しい¹⁶⁾。「洞簫賦」は洞簫の材たる「江南」の竹の繁茂する姿から説きはじめる。その一節に「秋蛸不食，抱樸而長吟兮，玄猿悲嘯，搜索乎其間」の対句がある¹⁷⁾。サルが悲しい声をあげながら竹林をさまようさまを詠んでいる。「悲」の文字からくだんの猿声が悲痛のひびきであること、確実である。王褒は前漢の宣帝(在位前74～前49年)につかえた宮廷文人だから、前1世紀中ごろの人ということになる。前漢のなかば、すでに猿声は悲哀の語感を獲得していたのだ。

わたしは「洞簫賦」の上掲例について、つぎの2点に注目したい。ひとつは「猿声=悲哀」の等式が前漢の宣帝期すでに成立していること、もうひとつは最早の用例に猿(猿)が「嘯」とあることだ。前者については次章で再説するとして、いま後者について述べよう。私見によれば、嘯の語義こそが猿声が悲声と認識される端緒であった。嘯に関する基本文献は、青木正児「嘯」の歴史と字義の変遷(『青木正児全集』第8巻、春秋社、1971年。初出1957年。以下、青木論文)と、澤田瑞穂「嘯の源流」(『修訂中国の呪法』平河出版社、1992年。初出1974年。以下、澤田論文)と思われる。両論文にみちびかれ嘯のなんたるかを整理しておこう¹⁸⁾。

嘯とはなにか。手がかりは『詩経』召南の江有汜の「其嘯也歌」に附せられた鄭箋に見える。鄭玄は「嘯，蹙口而出声」と注する。口をすぼめて唇のすき間から呼気を出す、という説明だが、要するにこれは口笛である。いま嘯は「うそぶく」と訓まれるが、和語の「うそ」ないし

「うそふ（ぶ）く」も口笛（をふくこと）の意である¹⁹⁾。のちには、口をすぼめることなく両唇を離し開口したまま発声することをも嘯と呼んだらしい。

ただ古代中国において、嘯の用途は南北でちがったようである。北方では『詩経』に初出する悲しみや怨みの表白としての嘯、南方では『楚辞』に初出する招魂のための呪法あるいは一種の呼吸法としての嘯²⁰⁾の用法があった。前者の用法は小論にとって興味ぶかい。まず、『詩経』に見える嘯（歎）の用例およそ三つを列举しよう。

江有沱，之子帰，不我過，不我過，其嘯也歌。 (召南，江有汜)
 有女仳離，条其歎矣，条其歎矣，遇人之不淑矣。 (王風，中谷有蓷)
 嘯歌傷懷，念彼碩人。 (小雅，白華)

これらみな、女性が悲しみや怨みの感情をもらすために嘯している。嘯とは感傷のあまり発する悲声と解せられる。たとえば前漢末の劉向『列女伝』巻3、仁智の「魯漆室女」に、

過時未適人，当穆公時，君老，太子幼。女倚柱而嘯，旁人聞之，莫不為之慘者。其鄰人婦從之遊，謂曰，何嘯之悲也……。漆室女曰……吾豈為不嫁不樂而悲哉，吾憂魯君老，太子幼。

とあるのも女性の声であるが、すでに漢代には嘯の主体は女性にかぎらず、また実際に口笛をふくのではなく、たんに悲声の義にもちいられている。たとえば、おなじく劉向『新序』巻5、雑事に「龍興而鳥集，悲嘯長吟」とあるのや、後漢の馬融「長笛賦」（李善注『文選』巻18）に「山雞晨群，壘雉晁雉，求偶鳴子，悲号長嘯」とあるのは動物が悲声の主体。「長嘯」は長く尾を引いて発声するからいうのであろう。范曄『後漢書』列伝3、隗囂伝に「所以吟嘯扼腕，垂涕登車」とある。ここで嘆き悲しむのは、隗囂の友人たる王遵と隗囂の部下の牛邯である。つまり人の男性による悲慨の表明というわけだ。

本章の記述を整理しておこう。

- (1) 嘯とは口をすぼめて呼気を出すこと
- (2) 嘯は華北では悲哀の表明であったこと
- (3) 悲声としての猿声の初出に「猿が嘯する」とあること

この3点は、猿声が悲哀の語感を獲得した所以を論ずるうえで看過できない。そのわけをふくめ、章をあらため述べよう。

3 猿声と嘯

小論の読者はテナガザルの鳴く姿を見たことがあるだろうか。

わたしは実際にこの目で見たことはないのだが、ネット等にあがっている動画などからその姿を見知っている。そのときのテナガザルの口のかたちは上述の嘯によく似る。図1～3を見てほしい。人間の口笛ほどに両唇をすぼめないものの唇をやや前方にとがらして鳴くさまは、さきに引いた鄭箋の「蹙口而出声」を思わせる。じつは、テナガザルの鳴くときの面容を見たとき、わたしは「これは嘯だ」と直感したのだが、古代中国人もおなじ直感を得たのではないだろうか。そう思うのは、中国のとくに南方で早くからテナガザルがペットとして飼育されていたからである。テナガザルは通常、森の樹冠にすみ地上に下りてくることは稀で、声はよく聞くものの姿はほとんど見えないという²¹⁾。しかし深山ではなく身近にいるペットであれば、その鳴き姿なかんずく両唇の様子はむろん実見し得たはずだ。

テナガザル飼育の徴証は少なくない²²⁾。たとえば『淮南子』説山訓に「楚王亡其猿，而林木為之残」，また「楚王有白蟻，王自射之，則搏矢而熙，使養由基射之，始調弓矯矢未発，而蟻擁柱号矣」とある。前者は楚王の飼っていたテナガザルが逃げてしまって、それを探し出すため森林を伐採した話，後者は楚王が飼っていた白猿は王の弓矢はおそれぬのに名人の養由基のそれはおそれて泣きさけぶという話²³⁾。ともに楚王がテナガザルを飼育していたことをつたえる。楚はテナガザルの棲息地たる長江流域の国だった²⁴⁾。さらに『淮南子』の俶真訓に「置猿檻中，則与豚同」とあるのは、猿の飼育のあったことを示唆しよう。このようにテナガザルの棲息地域では古い時代からこれを飼っていたのだ。やや北方の宋でも狙公なる大量の猿飼育者がいた。『列子』巻2，黄帝篇には「宋有狙公者，愛狙養之成群，能解狙之意，狙亦得公之心……」とある²⁵⁾。狙は猿におなじ，テナガザルのこと。該文は有名な「朝三暮四」の典拠である。ややくだった前漢の武帝の上林苑はいまでいえば動物園のような施設だが，そのなかに「玄猿」の飼育されていたことが，司馬相如「上林賦」より知られる²⁶⁾。これはわざわざ南方で捕獲し運んできたものであろう。考古資料では，中山王国の王墓から出土した「十五連蓋燭台」をあげておこう²⁷⁾。樹木を模した燭台で，15の枝の先に蓋を配しその枝に4対8匹のテナガザルが種々のポーズでつかまっている。樹下には二人の飼育員らしき人物も見え，これらのテナガザルは王のペットだったと推される。中山王国は戦国時代いまの河北省にあった小国である。

動物の鳴き声らしき音声を聞いてその声の主がいずれの動物であるか，これを判断するには鳴き声だけでは材料不足で，やはり動物の鳴く姿を見なければ声の主を特定できないはずだ。少なくともある時期にそういう段階があって，この鳴き声はこの動物のものであるといった知識が蓄積されるのだろう。巫峡にひびく鳴き声がテナガザルのそれだと分かるということは，ある時期にテナガザルの鳴くところを実際に見た人間がいなくてはならない。テナガザルは人



図1 歌うチーニー（アジルテナガザル，5歳）



図2 高い止まり木に腰かけて歌うチーニー



図3 木の上で歌うピッター
（シロテナガザル，4歳）

出典：ロベルト・ハンス・ファン・フーリク『中国のテナガザル』（中野美代子・高橋宣勝訳，博品社，1992年。原著1967年刊）23頁。小論の注13を参看のこと。

間に視認できない深山幽谷にいたばかりでないし、ペットとしてなど人間の目にふれる機会があったのだし。

おそくとも戦国時代には、テナガザルの鳴き姿なかんづく両唇の様子が人間に知られていただろうとは、まず首肯される推論と思われるが、私見ではこのことが猿声が悲声と認識される必要条件であった。両唇の形から嘯を連想するのはそう困難なことではない。しかも南方の嘯ではなく華北のそれを連想したならば、鳴き姿を見て「猿が悲しんでいる」と判断した可能性は十分ある²⁸⁾。

ここでふたたび「洞簫賦」をとりあげたい。前章で「洞簫賦」に言及したさい、猿声をば「猿が嘯する」と表現していることとともに、前漢宣帝期すでに猿声が悲哀の語感を獲得していたことに注目した。なぜ前漢宣帝期の作例が「猿声＝悲声」の初出なのか。いささかでもこれに意味をもたせるならば、秦漢という統一王朝の成立を背景に想定できるかもしれない。

「洞簫賦」は「玄猿悲嘯」とつづるのだが、これは南方の動物たるテナガザルが華北の習俗であった嘯をしているという句づくりである。つまり南方の産物を華北の習俗をとおして眺めているのだ。このようなことが可能になるには、華北の習俗が南方にもちこまれるか、あるいは南方の産物が華北にもちこまれる必要がある。秦漢という統一王朝の成立はこれに資したはずだ。モノや習俗が移動するには人の往来が不可欠だが、始皇帝が戦国諸国を統一したことによって旧来の国境をこえた人の恒常的往来が生まれたであろう。統一以前おもに外交使節・遊説家・客商あるいは軍隊などが限定的臨時的に国境線を行き来していたのが、統一以後では国境が消滅したうえ、恒常的に中央地方間の官僚の往来があり、さらに徭役・租税の輸送とその牽引、従来以上の客商の移動などがあった。小論にとって重要な華北・南方（たとえば長江流域の巴蜀・楚の地域）間もその例にもれまい。つまるところ統一王朝の成立は、それまで戦国各国に分裂していた諸地域（たとえば華北と長江地域と）を統合し恒常的な接触を発生促進させたといえる²⁹⁾。とくに宣帝の2代まえの武帝の時代には、郡国制とはいいいながら実質的には郡県制とかわらない中央集権体制が確立された。こうなると、テナガザルは南方限定の存在ではなくなる。領域内の動植物を集成しようとした武帝の上林苑にテナガザルが飼育されていたのも統一王朝ならではといえよう。

このように華北と南方とに恒常的な人の往来が生まれれば、いきおい華北の習俗をもって南方の風物が再解釈され詩文に詠まれるようになるだろう。猿声はその一例ではなかったか。南北の連結およびそれによる人的往来の頻繁は、南方の産物のテナガザルの鳴く様子を華北の習俗たる悲声の嘯にあたらしく認識する契機になった、とわたしは思うのである。

さて、テナガザルが人間にちかい動物あるいは神聖な動物と目されていたことは上述のとおりだが、それがテナガザルの発声行為をとくに意味づける動機になった可能性がある。『太平御覧』巻910の猿に引く『春秋繁露』が「猿似猴，大而黒，長前臂，所以寿者，好引其氣也」という³⁰⁾。引気とは道家の錬気の術における一種の呼吸法と思しいが、南方の嘯の一変形とい

うべきで、これによってテナガザルは長生きするものが多いという。テナガザルが長寿であると述べる記事は多い³¹⁾。

長寿とあの独特の発声とに連絡を見出したことは、背景にテナガザルを神聖な動物であるとする価値観があったであろう。『春秋繁露』はいちおう前漢の董仲舒の撰とされている。そうであれば前漢なかばテナガザルの発声への注視があったことになるし、そのような注視はずっと過去にさかのぼるはずだ。それは『楚辞』がすでにテナガザルの鳴き声を詠んでいることから推知される。おそらく当初はテナガザルの棲息する中国南方にかぎられた価値観であったろうが、やがて中原にも知られたであろう。とくに秦漢の統一王朝が成立してからは一定程度そうであったろう。すでに発声への注視が南方であったのだから、これを華北の習俗にもとづきすばやく読みかえるのは容易なことである。

本章の記述を整理しておこう。

- (4) テナガザルは早くからペットとして飼育されていたので、発声時の両唇の様子はむろん観察されていたであろうこと
- (5) 秦漢統一帝国の成立によって、華北と南方との統合が実現し、華北の習俗で南方の風物が再解釈され詩文に詠まれたであろうこと
- (6) テナガザルが神聖視されたことより、早い時期すでに南方でテナガザルの発声への注視があったこと

おわりに

以上の論述、とくに (1) から (6) を総合すれば、つぎのようになろうか。

猿声の猿とはまずはテナガザルを指す。テナガザルは南方の産で当地では早くから神聖な動物とされていた。それを背景に独特な鳴き声も注意された。ペットとして飼育されていたので、鳴き姿たとえば両唇の様子が観察されていたことは想像にかたくない。秦漢統一帝国の成立によって、華北と南方との統合が実現し、華北の習俗で南方の風物が再解釈され詩文に詠まれるようになった。そのひとつがテナガザルの発声行為である。華北には嘯という習俗があった。これは悲しみの感情の表白として口をすぼめて呼気を出す行為をいう。その姿態はテナガザルの発声時の両唇の様子によく似ている。この類似からテナガザルの発声は悲哀の表明であるという連想が生じ詩文に詠まれるようになった。ただ猿声が悲声であるという着想はひろがらず、その拡大は「漁者歌」の流行をまたねばならなかった。おおむねこのように整理できようか。

猿声が悲哀の詩語として定着するうえで、松浦のいうように「漁者歌」のはたした役割はおおきいのであろう。猿声を詠みこんだ詩が六朝から急増する事実はこのものがたっている。「漁者歌」が詩人たちの支持をえた背景に晋室の南渡があったのはまちがいない。多くの漢人

が長江流域に移住し、「漁者歌」に詠われた風土を目の当たりにしたことが詩語たる猿声の確立に寄与したはずである。東晋の成立にともなる漢人の大量南下から、詩語「猿声」の定着を説明するのは理解しやすい。

小論の考察によって猿声が悲声であるからくりを解けたとは思わないが、ひとつの解釈としてはありうると考える。ただ、いままでに得られた材料だけでは問題の解明は困難というのも正直なところで、やはり小論は試論にとどまる。

中野美代子が「もっと具体的なこと、もっと可視的なものが古代人のあらゆる発想の源泉になったのではなかろうか」というのは³²⁾、猿声にも該当しそうに思う。猿の鳴き声に悲哀を感じるそもその端緒は、音声のような抽象性のつよいものではなく、顔面の唇の形という可視的なところにあったというのが小論の帰結である。現実家たる漢人の美意識ならではと、わたしには感じられるのだが……。

注

- 1) 松浦にはほかにも同趣旨の論考がある。松浦「『猿の声』と『鹿の声』ii iii」（『万葉集という双関語——日中詩学ノート』大修館書店、1995年。初出1993年）、同「秋の猿」（黒川洋一ほか編『中国文学歳時記 秋下』同朋舎出版、1989年）。松浦の主張は松浦論文につづいているので、これで代表させる。また、高橋良行「詩語としての『猿声』」（松浦友久編著『統校注唐詩解釈辞典〔付〕歴代詩』（大修館書店、2001年）が松浦論文の要旨を整理している。
- 2) 猿声における『詩経』と『楚辞』とのくだんの相違は、松浦論文のいうように、両書の成立年代のちがいがというより、詠作の舞台という地理的差異によるところが大きいと推量される。猿は黄河流域より高温多湿の長江流域にこそ多く分布していたであろうから。なお『詩経』に1箇所だけサルが登場するもの（小雅、角弓）、それはサルの木登りの巧みさをいうにすぎない（後述）。やはり『詩経』には猿声の用例は見あたらない。
- 3) 「猿」は「猿」の本字、さらにふるくは「猿」の字をもちいた。『説文解字』には「猿」のみあって「猿」は見えない。
- 4) 陸疏はしばしば孫呉の陸璣の撰とされるが、その成立事情ははっきりしない。小林清市「陸疏の素描」（『中国博物学の世界』、東京、農山漁村文化協会、2003年。初出1987年）によれば、陸疏は単独の撰者をもたず複数人の注の集成であり、したがって成立時期も曹魏から北魏のあいだと考えられるという。小林は歩をすすめて東晋の郭璞以前の成立を想定する。たしかに『山海経』巻1、南山経の最初のほう、堂庭之山の条に「多棧木、多白猿」とあって、これに郭璞が「今猿似獼猴而大、臂脚長便捷、色有黒有黄。鳴、其声哀」と注する。郭璞（276～324）は西晋末～東晋初の人、そのころすでに「猿声＝悲哀」のイメージが成っていたと知られる。ただ、陸疏の撰者問題は小論の議論に影響しない。後段で述べるように、「猿声＝悲哀」の用例は陸疏をさらにさかのぼり、前漢中ごろまで遡及できるからである。
- 5) 『太平御覧』巻910、猿にもほぼ同様の佚文あり。『説郛』巻61は「宜都記」の名で収載する。『説郛三種』（上海古籍出版社、1988年）2815頁。
- 6) 『世説新語』黜免篇の劉孝標注がほぼ同文を引いている。
- 7) くだんの「巴東」については、張良・施從超「《巴東三峡歌》之“巴東”考辨」（『沈陽農業大学学报』〈社会科学版〉第9巻第1期、2007年）参看。
- 8) 秦耕司「李白『早發白帝城』の作詩背景について——特に詩語“猿声”との関連において」（『長崎県立大学論集』第30巻第2号、1996年）の専論あり。
- 9) 猿と猴との差別について、高島俊男「サルと猴とはどうちがう」（『お言葉ですが…9 芭蕉のガール

フレンド』文藝春秋、2008年。初出2004年）が簡潔に整理している。テナガザルは腕の長いことが一大特徴で、現代漢語で「長臂猿」と呼ぶのはこのゆえである。李海霞『漢語動物命名考釈』（巴蜀書社、2005年）が諸書から猿（6～7頁）と猿（16～18頁）との用例をいくらか集めている。猿と猴と、その隣の音はみな喉音であり、おそらくそれぞれの鳴き声を写しているのであろう。中国古典に猿声に固有のオノマトペはないようだが、しばしば「嗷嗷」の語がもちいられる（松浦論文35頁）。ちなみに現代漢語だとサルの鳴き声は「吱吱」と書くらしい（野口宗親編著『中国語擬音語辞典』東方書店、1995年、117頁）。テナガザルとは無関係だが、『常陸国風土記』久慈郡に、河内里の本名「古々之邑」について原注に「俗説謂猿声為古々」とある。サルがココと鳴くところ、これをそのまま地名にしたという（日本古典文学大系本82頁）。これは「猿」とあるが、日本にテナガザルは棲息しないので猿の鳴き声であろう。大伴旅人「讀酒歌十三首」其一（巻3、344歌）の「あな醜賢しらすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る」は、利口ぶってふるまう人間をサルに似ると馬鹿にしている。この「猿」もテナガザルではあるまい。日本に棲息しない猿ではあるが、日本の漢詩文にはさかんに登場する。小島憲之「訓み」の一、二について（『国風暗黒時代の文学』補篇、塙書房、2002年。初出1984年）、于永梅「平安時代の漢詩文における「猿声」「鹿鳴」の受容」（『待兼山論叢』第38号、2004年）参看。また漢詩文の影響の濃い俳諧も同様であること、金田房子「俳諧の猿」（鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史』獣の巻、三弥井書店、2011年）が説く。日本文化史上のサルの位置づけについては、広瀬鎮『猿』（法政大学出版局、1979年）、大貫恵美子『日本文化と猿』（平凡社、1995年）参看。

- 10) 現在の霊長類でもテナガザルは、チンパンジー、ゴリラ、オランウータンとならんで、最も人間にちかい類人猿の1グループとされている。
- 11) 「憎王孫文」の寓意もふくめ、清水茂『唐宋八家文』上（朝日新聞社、1966年）312～323頁参看。猿と王孫すなわち猴との寓意性は後世に流用された。たとえば、元末の戴良はその一人であること、平田昌司「遠ざかる猿の記憶」（『立命館文学』第598号、2007年）にくわしい。なお、鄭高味「猿のイメージに関する一考察」（『言語と文化』愛知大学、No.11）も、中国文化史上における猿と猴との相違を多くの例をあげて説く。なお漢籍に「雌」という、ことのほか仁義にあついサルが出名する。南方熊楠「雌という獣の話」（『南方熊楠全集』第5巻、平凡社、1972年。初出1915年）によれば、これは猴の一類らしい。猴でも良くいわれることはあったようだ。また南方は『淮南子』巻19、修務訓によって漢代の楚地方で猴食を忌んだことをいう（295頁）。エバーハルト（白鳥芳郎監訳）『古代中国の地方文化』（六興出版、1987年。原著は1968年刊）は、猿文化（長江流域の山地民・焼畑農耕の文化）の領域ではおおいに「猿」食したのと対照的に楚では「猿」食しなかったことをあげ、楚で「猿」タブーがあったことを推測している。自分を「猿」の子孫と信じる人びとは「猿」を喰わないという（56～57頁）。なお本邦訳本ではサルには通して「猿」の訳語が使われているらしく、エバーハルトのいうサルが猿なのか猴なのか、原著を見ていないわたしには分からない。ちなみに『西遊記』の孫悟空は、南宋刊『大唐三蔵取経詩話』ほかで「猴行者」とあるように猴である。ありふれた猿がなにゆえ仏法を奉ずるのか諸説ある。たとえばサル崇拜のさかんなインド由来とする説など。磯部彰「孫悟空像の形成とその発展」（『西遊記』形成史の研究』創文社、1993年。初出1977年）、豊後宏記「胡とサル」（『学林』第20号、1994年）などの学説整理を参看。石田英一郎『新版河童駒引考』（岩波書店、岩波文庫、1994年。もと東京大学出版会、1966年）第3章「猿と水神」は、唐代説話中に水獣とサルとの密接な聯絡のあることを紹介し、これがサル崇拜のつよいインドに由来する可能性を説く。ただ石田は猿と猴とを区別していないようだが。
- 12) 該文は現行の『抱朴子』には見えない。『藝文類聚』巻90・95、『太平御覽』巻74・85・888・916にもほぼ同文あり。『抱朴子』は晋の葛洪の撰。
- 13) とくにその「序」を参看。フーリクは実際にテナガザルを飼っていた。アジルテナガザルのチーニーと、シロテナガザルのピッターである。該書23頁にはこれら手飼のテナガザルの鳴き姿のスナップ数枚がおさめられおり、小論は図1～3としてこれを拝借した。フーリクそのひとの多才ぶりについて、中野美代子による該書「訳者あとがき」のほか同「「ディー判官もの」の作者」（『仙界とボルノグラフィー』河出書房新社、1995年。初出1988年）にくわしい。
- 14) テナガザルの鳴き声を实地調査した、香田啓貴・親川千紗子「インドネシア・スマトラ島におけるア

- ジルテナガザルの生息実態調査——音声を手がかりとして」(『霊長類研究』Vol.22, 2006年), 正高信男「テナガザルの歌に言語の起源をさぐる」(『学会会報』第863号, 2007年) 参看。
- 15) You Tube に複数の動画がアップされているし、ネット上の正高信男「テナガザルの歌に言語の起源をさぐる」(『生命誌ジャーナル』2006年夏号。https://www.brh.co.jp/seimeishi/journal/049/research_21_2.html) でもテナガザルの歌が聴ける。
 - 16) 王褒の先輩たる司馬相如の「長門賦」に「孔雀集而相存兮，玄猿嘯而長吟」とある。ここに悲声を確言する文字はないが、後述するように「嘯」そのものに悲哀の語義があるから、該賦は悲声たる猿声の最早の例かもしれない。
 - 17) 王褒「洞簫賦」については、たとえば上原尉暢「王褒「洞簫賦」における自然描写をめぐって」(『東北大学中国語学文学論集』第16号, 2011年), 同「王褒「洞簫賦」をめぐって——音楽描写を中心に」(『集刊東洋学』第107号, 2012年) など参看。
 - 18) 中国における嘯の研究については、李曉明「“嘯”的歴史性發展研究綜述」(『社科縱横』〈新理論版〉2012年4期, 2012年) が諸研究を整理して有用である。
 - 19) 佐竹昭広「天人女房のこと」(『民話の思想』平凡社, 1973年。初出1970年) 104頁。
 - 20) 青木論文によれば、このような悲哀の表明たる嘯は魏晉以後は劣勢になり、かえて『楚辭』などに初出する南方系の嘯が優勢になる。これは晋室の南遷によろう。南方系の嘯についてはとくに澤田論文にくわしいが、要するに道家の引気をイメージすればよからう。隆慶一郎の小説『風の呪殺陣』(『隆慶一郎全集』第2巻, 新潮社, 1995年) で主人公の昇運がおこなう嘯がこれである(523～524頁)。なお後掲の『詩経』に見える3例の嘯をも南方系の嘯で理解する説もある。福本郁子「『詩経』に於ける「于嗟」「歎」「嘯」に就いて」(『二松学舎大学論集』第44号, 2001年)。この南方由来の嘯がわが上代にも流行したこと、万葉歌人・高橋虫麻呂の作例などから知られる。梅林史「高橋虫麻呂「検税使大伴卿が筑波山に登る時の歌」(伊藤博博士古稀記念会編『伊藤博博士古稀記念論文集 萬葉学藻』塙書房, 1996年), 内田賢徳「風と口笛」(説話と説話文学の会編『説話論集』第6集, 1997年) 参看。さて日本の狂言面に「うそふき」がある。狂言面にかんする最初の文献とされる大蔵虎明『わらんべ草』(1660年成) に紹介された39面のうちに、すでに「うそふき」はある。実物を見るに、そのさまは口を突き出したまさしく嘯の姿である。蚊の精や案山子などにもちいるらしいが、わたしにはサルの面に見えてしかたがない。小論がとりあげる「猿声」と関聯があるや否や。なお日本における嘯について、小山田与清『松屋筆記』巻83が多くの資料を蒐集している。査読者からの教示として下記のことを追記しておく。「嘯」の口偏は声調を区別する目印にすぎない可能性がある。すなわち、平声の「肅」に口偏が付くのは「嘯」が去声になることをしめす記号というわけである。口偏のないものをA, 口偏を加えたものをBとすると、AとBは「諧声関係」にあることが多いという。諧声関係というのは、一般に声調のみ異なる同音字あるいは近音字を示すが、南方方言、たとえば客家語では「文白異讀」を示す場合と「変調」を示す場合があるらしい。ただ「嘯」の「口偏は声調を区別する目印」説ははまだ認められているわけではない。もっとも、小論は『詩経』正文の解釈における鄭箋の有効性を論じているのではない。漢代華北に行われた「嘯」という習俗が鄭玄のいったとおりの内容だったと思われ、これが「猿声」を解するには有効と判断しているのである。
 - 21) たとえば、フォーリク『中国のテナガザル』(前掲) 10頁。
 - 22) テナガザル飼育の記事は、たとえばフォーリク『中国のテナガザル』(前掲), 前野直彬「猿」(『風月無尽——中国の古典と自然』東京大学出版会, 1972年) に蒐集されている。
 - 23) 『呂氏春秋』不苟論博志篇にも同様の話柄が見える。
 - 24) テナガザルは、いま中国では希少種である。古代にあっては長江三峡地区および湖南省西北部を北限として棲息していたが、現在は海南島と雲南省とにわずかに分布するにすぎない。高耀亭・文煥然・何業恒「歴史時期中国長臂猿分布の変遷」(文煥然ほか『中国歴史時期植物と動物変遷研究』重慶出版社, 2006年。初出1981年), 劉威『猴与猿』(中国科学図書儀器公司出版, 1954年) 56～60頁, 陳元霖・曾中興・白寿昌編著『獼猴』(科学出版社, 1985年) 19～20頁参看。現在、テナガザルはマレー半島、スマトラ島など赤道にちかい東南アジアの熱帯林におもに棲息している。
 - 25) 『莊子』齊物論にも同一話柄あり。
 - 26) 李健超「秦嶺地区古代獸類と環境変遷」(『中国歴史地理論叢』第17巻第4輯, 2002年) 35～36頁。

- 27) 中野美代子『孫悟空の誕生』(岩波書店, 2002年。もと1980年刊) 21頁の図3。
- 28) 「猿鳴」「猿啼」などのいい方はテナガザルの鳴くさまを見なくても表現できるが、「猿嘯」は実見しなくてはつかえない用字ではないか。ただいっぽうで、「猿声=悲哀」のイメージが成立したゆえに猿と嘯とが接続し「猿嘯」の語が生まれたという経緯も想定しておかねばならない。つまり、猿が嘯するさまから猿声に悲哀の語感が生じたという小論の主張とは、原因と結果とが入れ替った経緯もいちおう考慮すべきということである。しかしその可能性は低いと考える。第一の理由は王褒「洞簫賦」の用字である。悲声としての猿声の初出ですでに嘯の字が見えることは、猿と嘯との結合が後付けでないことを示している。第二の理由は『楚辞』の用例である。猿声が『楚辞』系の詩語として出発したらしいことは既述のとおりだが、『楚辞』では猿の鳴くさまが「嘯」と表現され、かつ悲哀の語感をともなっていない(上掲招隠士の「猿狖群嘯兮虎豹嘯」の一句)。猿と嘯とが連結する以前に猿声が悲哀の語感をおびることはなかったと推量される。
- 29) 秦漢による統一が前代以上の南北間の往来を実現したであろうことは容易に想像できよう。ただし統一の意義を過大に評価するのは慎まなければならぬ。国境が消滅したからといって人が自由に歩き来でたわけではなく、人の移動には引きつづきおおきな制限があった。たとえば、秦の統一以降も戦国秦の国境線は厳重に管理されていたこと、鶴間和幸『秦帝国の形成と地域』(汲古書院, 2013年) 43~44頁が説いている。近年、長江流域から陸統と簡牘が出土し、これらによって中原と長江流域との交渉の具体像が明らかになってきた。鶴間の研究はその代表的成果のひとつだが、ほかに以下の論著をあげておく。藤田勝久『中国古代国家と社会システム——長江流域出土資料の研究』(汲古書院, 2009年)の第1・11章など、工藤元男『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』(創文社, 1998年)の第9章・終章など、同「秦の中国統一と南方社会」(『古代中国文明の謎』光文社, 1988年)、同「法と習俗」(『古いと中国古代の社会』東方書店, 2011年。初出2009年)、大西克也「戦国時代の文字と言葉——秦・楚の違いを中心に」(長江流域文化研究所編『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』雄山閣, 2006年)。これら簡牘史料は、中央で編纂された従来の史料からは見えなかった在地社会の現実をおしえる。統一王朝の成立は、在地社会の習俗や規範を追放し中原のさだめたシステムによる一元的支配を実現するはずだったが、現実には在地社会の固有性をなかなか超克できなかったようである。しかし、官僚や軍隊など王朝による旧戦国諸地域間の人的移動は、統一ののち時間を経過するにしたがい進展したとは、たかい確度をもっていってよからう。
- 30) 『春秋繁露』巻16、循天之道篇に「猿之所以寿者, 好引其末, 是故氣四越」とある。『太平御覧』の該条はおそらくこれの異文と推される。なお『初学記』巻29、猿では『太平御覧』の「所以寿者」を「寿八百」につくる。また明の李自珍『本草綱目』巻51、獸部「猿」に、「猿善援引, 故謂之猿, 俗作猿……似猴而長大, 其臂甚長, 能引氣, 故多寿」とある。
- 31) たとえば、『抱朴子』内篇巻3、対俗篇に「獼猴寿八百歳變為猿, 猿寿五百歳變為獼, 獼寿千歳」とある。猿は猴類より格上でかつ長寿なのだ。
- 32) 中野美代子『迷宮としての人間』(潮出版社, 1972年) 130頁。

Why is the bleat of the Gibbon regrettable?

Masahiro IKEDA

Contents

Introduction

1 Establishment of the lyrical word “The bleat of the Gibbon”

2 Xiao and Expression of the sorrow

3 The bleat of the Gibbon and Xiao

Conclusion

Keywords: The bleat of the Gibbon, Gibbon, Xiao, Zhengxuan Note of *Shijing*, *Dongxiaofu*